



全体会

パネルディスカッション

「過疎・離島・半島っていいね! 一本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り」

コーディネーター

宮口 侗 迪

(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

パネリスト

(五十音順)

アレックス・カー

(NPO 法人籠庵トラスト 理事長)

楓 千里

(株式会社 JTB パブリッシング 執行役員)

関 司 直 也

(法政大学現代福祉学部准教授)

友 広 郁 洋

(長崎県松浦市長)

養 父 信 夫

(「九州のムラ」編集長)

テーマ

過疎・離島・半島っていいね!

パネルディスカッション

コーディネーター

早稲田大学
教育・総合科学学術院教授
文学博士

みやぐち としみち
宮口 侗迪



富山県生まれ。東京大学地理学科、同大学院博士課程にて社会地理学を専攻。1975年より早稲田大学に勤務、教育学研究科長、教育・総合科学学術院長を歴任。総務省過疎問題懇談会座長として過疎法の拡充延長に尽力。富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長等を務め、社会地理学の立場から地方の発展のあり方について発言を続ける。

主著／『地域づくり・創造への歩み』(古今書院)、『新・地域を活かす——地理学者の地域づくり論——』(原書房)
編著／『若者と地域をつくる』(原書房)

パネリスト

東洋文化研究者
特定非営利活動法人
麓庵トラスト理事長

アレックス カー
Alex Kerr



米国生まれ。1964年家族と共に初来日。エール大学、英国オックスフォード大学卒業後、1977年より京都府亀岡市に在住し、日本と東アジア文化に関する講演、執筆等に携わる。2004年から2010年京都で町家再生事業を営む。現在はNPO法人「チイオリ・トラスト」の理事長として伝統家屋の修築保存活動、景観コンサルタントを日本各地で展開。

著書／『美しき日本の残像』(1993年新潮社、新潮学芸賞受賞)、『犬と鬼』(2002年講談社)、『世流に逆らう』(2012年北星社)など

パネリスト

株式会社JTBパブリッシング
執行役員

かえで ちさと
楓 千里



学習院大学法学部卒業後、(株)日本交通公社入社、出版事業局配属。海外ガイドブックの編集、月刊誌「るるぶ」の編集などに携わる。1989年～「るるぶ」編集部副編集長/1999年～月刊誌「旅」編集部編集長/2004年10月(株)ジェイ・ティー・ビーから出版事業局が独立し、(株)JTBパブリッシング設立。同時に広告部長/2009年4月～執行役員法人事業部長/2011年4月執行役員ソリューション事業本部 副本部長 兼 会員サービス事業部長。総務省「地域の元気創造有識者会議」「地域づくり総務大臣表彰懇談会」委員等。地域活性化センター「ふるさとイベント大賞」選考委員。

パネリスト

法政大学
現代福祉学部准教授

ずし なおや
関司 直也



愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士(農学)。(財)日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師を経て、2009年より現職。(財)地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師、地域振興・人材育成に関するアドバイザー等を歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。

著書／『農山村再生に挑む』(共著：岩波書店)、『現代のむら—むら論と日本社会の展望』(共著：農山漁村文化協会)、『若者と地域をつくる』(共著：原書房)など

パネリスト

長崎県松浦市長

ともひろ いくひろ
友広 郁洋



長崎県生まれ。1962年に旧松浦市役所に入庁。2000年に同市助役に就任。市町合併を経て、2006年に初代松浦市長に就任。現在2期目。長崎県過疎地域自立促進協議会会長を務める。現在は、日本初の国指定海底遺跡「鷹島神崎遺跡」の保存活用や、市民の恒久的な安心・安全な暮らしを守るための災害対策など、「市民が主役のまち」「産業創造で活力あるまち」「夢と希望のあるまち」の考えのもと、市の将来像「次代をはぐくむ 産業創造都市 まつうら」の実現に向け猛進中。

パネリスト

「九州のムラ」編集長
九州ムラたび応援団 団長

ようふ のぶお
養父 信夫



福岡県宗像郡大島村、玄海町(現宗像市)で幼少を過ごす。1986年、九州大学法学部法律学科卒。同年、(株)リクルート入社。1998年に独立し都市と農村をつなぐグリーンツーリズムを広げる活動を開始。同年、「悠々とした地域生活の総合誌」「九州のムラ」の発行に携わる。現在同誌編集長として、地域に生きる人々の暮らしを中心に取材を重ね、「九州のムラ」を通じ、ムラとマチを繋げる。また講演や地域づくりのアドバイザーなど、グリーンツーリズムやスローフード運動の啓蒙活動も積極的に行っている。2005年からは(株)マインドシェアに統合し、全国のムラ事業展開に向けて準備中。「ムラガール」の名付親。

〈宮口〉皆さん、再びこんにちは。司会を務めさせていただき早稲田大学の宮口でございます。

今日の大会テーマは「過疎・離島・半島っていいね!」です。いいね!という、何かフェイスブックかななんて思いますけれども、先ほど県知事さんからも、長崎がいかに離島、半島の本場であるかというご挨拶がございましたが、そこで「本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り」をテーマに今日の大会が行われるわけでございます。これからのパネルディスカッションもそのような内容をふまえて進めさせていただきたいと思っています。

そのような過疎地域、離島、半島には、心安らく原風景の残る場所が多くございます。そうした地域にある本物の暮らしというものに対して、今、一見繁栄している都会の人たちは熱い視線を送り、今日も養父さんのムラガールという発言がございましたけれども、訪れて、ものすごく感動してくれる人たちがいるということでございます。そして、そこには人とのつながりがある、支え合いがあると。

私は、数は少なくとも、人と人の関係が濃ければ、数のパワーに負けない地域社会のパワーになるということをおかねてから申し上げておりますけれども、そういう地域であるということでもあります。

そして、外から見たときに、そこにはすばらしい輝きがあり、それにも影響されながら、みずから誇れるものを見つめ直すという時代になっている。そして、それが地域の誇りにつながるといようなことだと思っております。

本日は今から5人のパネリストの方々とその本物の魅力について、豊かさについて、そしてコミュニティのあり方について議論をしていただきたいと思います。司会者の方から皆さんのご紹介がありましたので、私から改めて紹介することはいた



しません。今からパネリストの方々に10分程度の時間を使っただき、過疎地域の魅力について、本物の魅力というのは何かということについて語っていただきたいと思っています。

最初に、恐縮ですけれども、松浦市長から、松浦市で今までどんなふうに通疎地域の活性化のために取り組んでこられたのかということのお話をいただきたいと思っています。それでは、友広市長、よろしく願います。

〈友広〉改めまして、こんにちは。長崎県過疎地域自立促進協議会の会長を務めております松浦市長の友広でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

長崎県内の過疎市町でございますが、21市町のうち12市町が過疎地域としての指定を受けているところでございまして、面積は県全体の66.8%を占めておりますが、人口はわずか25.2%ということでございます。長崎県内の概況については、中村知事さんから歓迎のご挨拶の中でご紹介がございましたので、ご理解いただけたのではないかと考えております。

松浦市は、福岡から西へ100キロ、長崎から北へ100キロの位置にございまして、長崎県の北部に位置する、人口約2万5,000人の半島、そして離島を有する、自然と人情の豊かなまちでございます。

ご承知のとおり、平成22年に過疎地域自立促進特別措置法の一部改正がございました。これを受けまして、松浦市といたしましても、過疎地域自立促進計画を策定いたしまして、現在、この計画に基づいて各種の振興策を講じているところでございます。

この振興策についてご説明申し上げる前に、松浦市は、平成18年1月1日に旧松浦市と鷹島町、福島町、1市2町が合併をいたしまして、新市として松浦市が誕生したところでございます。これを受け、平成19年から28年度までを計画期間とします総合計画を策定いたしまして、その目指すべき将来像を「時代を育む産業創造都市」と定めて、特に雇用と交流人口の拡大を柱にした施策を実施しているところでございます。

それでは、早速でございますが、取り組みの2、3についてご紹介をさせていただきたいと思いますが、やはりこの松浦市は基幹産業が農業、水産業でございますので、このことについては積極的に取り組まさせていただきますところでございます。

農業、漁業者の所得向上が、商業あるいは地域の活力を生み出すということで、所得向上につなげる施策を展開しております。特に水産のまち松浦を標榜

しております。水産資源の増大、そしていろいろな加工業などの取り組みをしているところでございます。その基礎となりますものは、やはり漁業資源ということで、種苗の放流と、もうひとつは養殖漁業に力を入れているところでございます。

特に養殖につきましては、国内有数のトラフグの養殖産地でございますし、クロマグロにいたしましても、現在やっと出荷時期を迎えることができたというところでございます。特にクロマグロを新しい松浦の養殖魚の柱としたいということで、市といたしましても、この種苗の確保あるいは一時畜養、生けすの整備などについて補助をしているところでございます。あわせて、マグロは複数年養殖を要するということから、単年度養殖で販売ができるように複合養殖についても力を入れてさせていただいております。特に高級魚と言われますクエなどの試験養殖にも取り組んでいるところでございます。総合的な対策を講じまして、消費者の動向あるいは時代のニーズに対応できるような水産業の振興に取り組んでいるところでございます。

おかげさまで、クロマグロも年間1万5,000から2万の種苗を確保できておりますけれども、出荷といたしましては約3,000尾以上の出荷ができるようになりましたし、売上高といたしましても、3億5,000万から4億程度の売り上げに今、到達したという状況でございます。

農業につきましては、皆様もご承知のとおり、イノシシをはじめとする有害鳥獣対策と耕作放棄地の対策に全力を挙げているところでございまして、松浦市といたしましては、特に耕作放棄地の対策として、放牧あるいは飼料作物の取り組みを進めているところでございます。特に和牛繁殖雌牛の1,000頭増頭という計画を立てまして、その増頭とあわせて、耕作放棄地への放牧と飼料作物の作付に、現在取り組んでいるというのが特徴でございます。

あわせて、松浦といいますと御厨という地名がございまして、従来からすばらしい農産物が生産されているということです。現在ブランド化されておりますものは、松浦メロンと御厨ぶどうというのがございまして、この拡大にも取り組んでおります。このことにつきましては、特にハウスの拡大につきまして、一生懸命支援を行っているところでございます。

本市の基幹産業である農業と漁業をしっかりと振興していこうということとあわせて、松浦市といたしましては、グルメ観光を今後しっかりとやっ

ていきたい。そのためには安全で安心でおいしい食材を確保するということから、今申しました漁業と農業の振興に力を入れているところでございます。



次に、次代を担う子供たちの健全育成ということにつきましても、力を入れているところでございます。

松浦市唯一の高校でございます松浦高校に対する支援を行わせていただいているところでございます。近年、松浦高校への生徒さんの応募が少なくなったということで、募集定員に対して50%台しか応募者がいないということから、松浦高校の存続がたいへん心配になったところでございます。しかし、市内で唯一の高等学校をしっかりと支えていく、そのためには生徒さんを確保する必要があるということから、松浦高校の魅力を高めていただくということとあわせて、市として側面的な支援をしていこうということで、実はいろいろな施策を講じさせていただいたところでございます。

入学準備金や、宿舎の関係についての支援、交通費の手当をするということに踏み切りまして、これらにつきましては、PTAさんに事業主体となっただいただいているところでございます。これまで入学者数が2桁でございましたけれども、平成25年度からこの支援を行うということで100名を超える入学者があったということで、一定の効果を上げているんじゃないかと認識をいたしているところでございます。

また、小中学校の児童・生徒に対する支援ということで、乳幼児に加えまして、本市独自で小学生、中学生に対する医療費助成を行わせていただいているところでございます。あわせて、子供さんのおられるご家庭の定住促進住宅への入居の場合は、住宅

使用料の減額や学校給食費の一部助成ということをしていただき、子供さんを生み育てやすい松浦市ということにしたいということで、現在、取り組ませていただいているところでございます。

ただひとつ、子供さんが非常に少なくなっているということから、子供さんがしっかりと成長していただくために、学校の適正配置ということにつきましても、地域住民の皆様方のご理解をいただきながら、現在、進めさせていただいている状況でございます。

松浦市ということになりますと、ここでどうしても皆様にご紹介したいと思っておりますのは、全国展開をいたしております体験型修学旅行事業でございます。このことにつきましては、今ある地域資源を活かして交流人口の拡大を図っていこうという取り組みでございます。

平成15年に1,000名の受け入れを開始したところでございますが、この受け入れ団体としまして、現在、一般社団法人まつうら党交流公社というものを設けまして、コーディネートしていただき、順調な実績を伸ばしております。平成24年度には3万5,000人の受け入れを行うことができるということで、全国におきましても、東の飯田、西の松浦と言われるように、注目を集め、高い評価をいただいているところでございます。

このことにつきましては、課題もあるわけがございます。受け入れていただく民泊の家庭の高齢化の問題と、修学旅行生ですので、春と秋に集中することから、これを周年化できないか、そして体験型の旅行事業というものをひとつの産業として松浦の地に定着させる必要があるということで、今、県のご指導をいただきながら、また、交流公社、松浦市一体となりまして、周年化に向けての取り組みをしているところでございます。このことについても今日、いろいろなご指導をいただければたいへんありがたいと思っております。

あわせて、雇用の場、働く場所の確保というのが市政の最大の課題でございます。

1次産業である農業、漁業を振興させて後継者の定着を図っていくということとあわせて、企業誘致などによる雇用の場の確保にも取り組んでいかなければならないということで、工業団地の造成などを行いながら、現在、全国にトップセールスとして、企業誘致に走り回っているところでございます。

私といたしましては、現状をしっかりと受けとめまして、松浦市だからできること、そして松浦の地域

特性を活かした、新しい将来性のある松浦市をつくっていこうと。そのためには過疎地域であるということを利用して、いろいろな制度の活用を図りながら、今後も積極的な市政運営に取り組んでまいりたいと、このように思っているところでございます。

以上で松浦の取り組みのご紹介にかえさせていただきます。ありがとうございました。

〈宮口〉 どうもありがとうございました。ほかにたくさん取り組みをやっておられると存じますけれども、時間の都合でこのぐらいにまとめていただきました。

高校を何とか支援するというようなお話もございました。それから、修学旅行の受け入れで交流公社というのをおつくりになったと。素晴らしいことだと思います。

それでは続きまして、楓さんに本物の魅力について、また、いろいろな例を紹介しながらお話いただきたいと思っております。ご自身が過去にやってこられた延長上に、こういうふうに見るんだというような感じで、自己紹介も兼ねてお願いできればと思います。

それでは、よろしくどうぞ。

〈楓〉 JTBパブリッシングの楓でございます。

私どもの会社は、『るるぶ』や、『時刻表』など、旅の本をつくる会社でございます。おそらくこの会場にいらして下さっている皆さんのところに、私どもの取材班が伺い、たいへんお世話になっているかと思っております。まずは御礼申し上げたいと思っております。

今、宮口先生からお話がありましたが、私は、昭和もはるかかなた昔に、当時の日本交通公社に入りましたけれども、最初から旅の本をつくる、旅の情



報を発信するという部門におりまして、残念ながら旅行業そのものは経験しておりません。ただ、ガイドブックや旅雑誌をつくる中で、いろいろなところ取材に伺い、そして地域の方たちとお話をさせていただく機会を持ってまいりましたので、それをふまえてお話をさせていただければと思っております。

地域のお話をする前に、ちょっと佐世保のことをひとつ。

今日、朝市に行ってまいりました。非常に素晴らしいと感動しました。今、全国津々浦々で朝市が行われていて、評判が良く、朝市でぜひお買い物をしたいという観光客の方がたくさんいらっしゃるんですけども、やや商業化されていて、新鮮なものが欲しいのに乾物類ばかり置いてあるという、がっかりする朝市もあります。その中で佐世保の朝市は素晴らしいです。地元の方が買い物をされていて、フレッシュなお魚やお野菜、日常に使う布巾だとか台所の用品とか、生活感溢れる品々が置いてあるのが魅力です。

朝市の案内は『るるぶ』にももちろん載っていますが、残念ながら泊まったホテルに案内がありませんでした。もう少し朝市をPRされたらいいのではないかなと思います。また、一軒だけ朝市の会場に食堂があって、朝市で買ったお魚をその場で食べられるのですが、市場内で、買ったものを食べて、お茶が飲めるようなスペースがあるといいなと感じました。

佐世保の観光の話はまた改めて。



今日は2つお話をさせてください。実際に本をつくる立場におりまして、いよいよ今、国内旅行が盛り上がっていると実感しています。地域の隅々まで行きたいという志向が、特にシニア層において高まっていると確信しております。

2つ目ですが、地域の方たちはそれぞれ、特に過疎

に関してはお困りのこと、問題を抱えていらっしゃると思いますが、実は都会も大きな課題や問題を抱えています。東京は東京オリンピック・パラリンピックで盛り上がっていると思われるかもしれませんが、その影で企業は、私どもも含めてですけども、人材育成面で抱えている問題がありまして、そういう問題の解決に地域の方の力をお借りしたいという機運が高まっています。この2つのお話をしたいと思います。

当社の商品で恐縮ですけど、『ノジュール』という月刊誌がございます。これは本屋さんでは売っていません。申込まれた方のご自宅にお届けする月刊誌でございます。たまたま今の『ノジュール』の竹内編集長は、宮口先生の直弟子でございます。

この『ノジュール』の8月号で、「懐かしくて美しい日本の原風景を旅する」という特集をいたしました。本屋さんには売っていませんので、こういう本が出ましたよというのは、新聞の広告で皆さんにお伝えしています。

実はこの号に、多くの方がお申込みくださり、反響がございました。現在、約5万人の方がこの本を読んでいます。この本を待っていたんです」という声をたくさんお寄せいただいています。実は編集長の竹内も、反響があるかどうかと、ちょっとおっかなびっくりつくった号でございました。

お手紙や、メールをよく読んでみると、1970年から80年代、ちょうど秘境ブームで、亡くなられた立松和乎先生が全国を回られ、放送された時代でもありますが、そのころバックパッカーだったり、一人で旅をされたり、それこそサイクリングで回ったりしていらした方々が、やっと時間の余裕ができて、あのころ行ったあのあたりはどうなっているのだろうか、あのころ見た田園風景、棚田はどうなっているのだろうかということに興味をお持ちになる、そういうタイミングになってきていることが判りました。

これは白川郷の写真です。この合掌づくりは皆さんとてもよくご存じだと思いますが、この写真のポイント、合掌づくりそのものではなくて、ここにある水田の風景です。合掌づくりだけでしたら、野外博物館のような場所にもありますが、水田の中にある建物だからこそ、この風景だからこそ、皆さんが見てみたいと思うのです。つまり原風景というのは、ああ、きれいだなということではなくて、ここに住む人の営みを感じられ、それが心に響き、訪れてみたいという気持ちに繋がるのです。

この合掌づくりの建物の上のほうは、蚕さんを飼う場所ですけれども、生活感があって、蚕さんはこんなところで飼っていたんだという生活の知恵がこの中にあらわれています。単に「きれいだな」だけでなく、原風景のよさ、原風景の奥ゆかしさは、その地域の方が培われてきた知恵を、「お裾分けしてほしいな」と思わせるところにあると思います。

長野県の栄村の秋山郷をご紹介します。栄村の方はいらっしゃいますか。非常に不便なところで、東京から新幹線を乗り継いでも4時間半かかるところです。この秋山郷は、地震があって、まだ仮設の住宅が残っているようなところですが、この地域の食べ物や、木工細工、狭い土地での耕作の仕方など、生活の知恵が詰まっている地域でして、そういうことに興味を持つシニア層が増えてきています。

この秋山郷に行ってみませんかというモニターツアーを『ノジュール』の中で募集いたしました。モニターツアーでも、交通費付きではなく、さっきのムラガールと一緒に、東京から4時間半かかる森宮原というJRの飯山線の駅までは自力で来てください、ただし秋山郷の中はご案内しますよというような、言ってみればたいへんハードなモニターツアーですけれども、15組の募集のところから100組以上の方に応募をいただきました。

ですので、行きにくいところであっても、そこには何か物語があったり、地域の生活の知恵を、お住まいの方たちから聞けるというプログラムであれば、おそらくシニア世代の方たちは興味を持って、いろいろなところに行ってみたいと思われるのだと思います。

たとえモニターツアーではなくても、非常に不便なところであっても、地域での過ごし方、実際の交通手段、域内の交通手段など丁寧に案内があれば、旅行の費用が多少高くても、その地域に行ってみたくと思われる方が確実にいらっしゃいます。これは旅行会社というよりも、旅行の本をつくっているという立場で実感しているところがございます。

一旦ここで、次にお話ししたいと思います。ちょっと時間が迫ってまいりました。

〈宮口〉 そうですね。何か時間を気にして、ちょっと遠慮された感じですけども、また後でたっぷりしゃべっていただきたいと思います。

生活の知恵が見えるような風景が原風景だということご発言がありました。それから、非常に行きにくいところでも、中はきちんとこういうふうに分けるので

すよというのがものすごい魅力になっているのではないかというお話がございました。

それでは、アレックス・カーさん、もともと日本の原風景に引かれて日本に住み、そしていろいろな活動をなさってきたんだと思いますけれども、ぜひそのあたりのお取り組みの紹介から始めて、コメントをいただきたいと思います。どうぞ。

〈カー〉 どうもありがとうございます。まず、個人的な話ですが、初めて日本に来たのは東京オリンピック開催の年でしたね。来年で日本に来て50年という、ちょっと怖い数字になりました。子供のときから親と一緒に来たわけですね。横浜に住んでいました。それから、日本とアメリカをずっと行き来して、大学もいろいろありましたが、その中で東京の大学にも行きました。



ちょうど71年の夏に、ヒッチハイクしながら全国一周をしたんですね。そのときは北海道から指宿まで、四国を含めて、ひと夏ずっと旅しました。もちろんそのとき長崎にも来ていますね。グラバー邸のあの時代の写真、17か18歳ぐらいの写真に載っていますね。長崎では雲仙とかいろいろまわりました。

旅の最後にたどり着いたのが徳島県の山奥にある祖谷という場所でした。祖先の「祖」に、「谷」と書いて、なぜか「いや」と読むんですね。もっと深い山、例えばさっきの長野の山はもっと高いですが、祖谷は「日本のグランドキャニオン」と言われているぐらい厳しく険しい山で、昔、平家落人が入って、隠れた場所なんですね。

そういう山ですから、田んぼも持てない、ある意味で稲作以前の日本という不思議な世界がタイムカプセルのように残っていました。茅葺き屋根の民家も

いっぱいありまして、当時でももう捨てられて、祖谷では過疎はとっくに始まっていたんですね。

そしたら、お金のない学生の僕でも、捨てられているものですから、ひょっとしたらこんな家も買えるのかなと思って、つい見つけた元禄時代の家を一軒買いました。ちょっと難しい字で説明できないのですが、その家に「^{ちいおり}簾庵」という屋号をつけました。

板の間で、いろいろがありました。まだあの時代は皆いろりを使っていたから、いろりの煙で床から柱から、茅葺き屋根の屋根裏から全部、漆で塗られているぐらいに黒光りしていました。その家は、家を買ったというよりも、土地を買いましたね。家は価値がないからおまけにと。でも、実際、元禄時代の300年前の家ですね。中に入ると、ある意味で300年どころか、1,000年も2,000年も前のたいへん古い時代の日本の生活が残っている場所です。

それから何十年かけて日本の過疎は、あんな祖谷のような平家落人部落だけじゃなくて、全国的に地方へと襲ってきました。国の対策として、とにかくインフラをつくりながら、土建とか建設とかでもって何とか地域社会を守っていこうと。あとは杉植林とか、そういうもののいろいろな構造がたぶん60年代とか70年代から始まったわけですね。

その中で、大きな道路をつくれれば人の生活が便利になるから住んでくれるだろうとか、とにかくコンクリートのぴかぴかした大きなものをつくれれば、それが経済発展だというふうになっていたんです。あとは箱物をつくったり、迎賓館をつくったり、美術館、資料館、そういうものをたくさん全国的につくってまいりました。一方、田舎は残念ながらどんどん減って行って、祖谷もそうですね。

しかし、ひとつ変なことが起きました。あんな何もない、いろりしかない、茅葺き屋根のところ、簾庵を僕が最初に見つけたときは、道路から山道を1時間歩かなくちゃいけなかったんですよ。今は道路があるんですけども。あんな不便な場所に、何と何万人というぐらいの観光客、その多くが欧米人、インバウンドの観光客がたくさん来るようになりました。

それは何で来るかというのは、意外と純粋な理由です、それこそ今日も何度も出てきた原風景という言葉ですが、生活感のある、そういうものを求めているんですね。統計を見て、徳島県がほかの県に比べてちょっと欧米のインバウンドが多いのに気づいて、簾庵というのは誰も聞いたことがないのに、ふっと電話をかけて、何で来ているのかと。迎賓館はないし、高速道路もないし、何もないようなところに何で

来るのかと。「何もないんだからいいよ」と。

そこで、何でもない魅力ということの後でもっとゆっくり話したいんだけど、意外と観光客は基本的にえらいものを求めているわけじゃないと思うんですね。例えばパリとかに行きますと、ルーブル美術館とかノートルダム大寺院とか、そういうのに行くのはいいんだけど、1か所か2か所見た後は、裏路地をちょっと歩きながら、パリの空気を吸うのがやはりパリの夢、パリの楽しみです。

そういうのもでもって、私が学生時代、祖谷に入ったころは、いろいろ生活の厳しい面もありながらも、田舎はきれいだったんですね。意外とまだ元気だった。子供もいたし、まだまだ家に皆住んでいましたが、どんどん深刻な状況になってしまって、何かできないのかと。

明らかに杉植林は国の大間違い、はかり知れないダメージを田舎に与えたわけですね。大きな公共事業の効果により一時的にゼネコンがちょっと潤うかもしれないけれども、大きな意味でお金を生むような、生活を助けるような事業になってなかった。何かできないのかと心配になりました。自分でいろいろ文章を書いたりしているんですが、具体的に一人の力で何かできないのかということを考えてました。

ここで、ごめんなさい、きっと話がちょっとオーバーするかもしれない。

〈宮口〉もう少しどうぞ。

〈カー〉遠慮された分をいただきます。

過疎という問題は、日本だけじゃないんですね。世界的な問題であります。

最近、非常におもしろい学問的な本が出ているんですけども、イタリアも大変、イギリスのスコットランドも大変、ロシアは日本以上のスピードでどんどん減って行っていきますね。中国も減り始めまして、そろそろ中国の田舎も似たような現象が見えてきて、ほぼ世界的な問題なんですね。

その中で、じゃあ、ほかの国、例えばフランスとかイタリア、あるいはアメリカのサンタフェとかあの周りの田舎はどんなことをしてきたかということ、健全な観光をやりました。健全な観光というのは、美しい田舎を守りながら、もとの人たちは出ていくわけですから、昔のそういう建物とかを新しくリフォームして、外部から人を引っ張ってくる。それは滞在もあるし、別荘地帯も非常に盛んですね。

それが今度、アジアにも、例えばバリ島も数十年前



から始めまして、美しい別荘だとか古民家とかをレンタルとして、ひとつのベッド・アンド・ブレックファスト、日本でいう宿泊施設として観光客に与えて、来ていただく。それでもって非常に元気な姿で、まだ生きている田舎がたくさんあります。

それで、私はいろいろなところをやったんですけれども、たまたま昨日ある取材がひとつあって、実はアレックス、何軒今までやってきたのかと。初めて検索しましたので発表します。レストラン、家を全部入れて46軒ですね。国の大きさとしては微々たるものですが、そこまでやってまいりました。

まずひとつ、非常にプライドに思っている、今でもよく行ってるのが小値賀ですね。小値賀の話ももうちょっと後でゆっくり話したいんですが、小値賀も大変な人口減少、限界集落に近いところがありました。何とかしようということで、町と話がついて、7軒を直しました。レストランも直したんですね。

私たちがやろうとしているのが、民泊とか民宿じゃなくて、非常にしゃれた直しです。というのが、今の日本の観光客はやはり苦勞はしたくない。とても快適な生活がしたい。特に小値賀まで行こうと思ったら、同じ時間とお金をかければ、パリへ行けるし、ホノルルへ行けるし、バンコクまで行けますよね。ですから、相手は世界ですから、中途半端な直しでは到底来てくれませんね。

結構いろいろ事業を全国的にやっていますけれども、いつもネックにあるのが、とてもきれいな景色とか、おもしろい田舎は見に行きたいんですが、いい宿泊先はないですね。ちょっと古くなった旅館、パッキングツアーしかできないような温泉街、そういうものは今の時代の嗜好に合わないの、お客は行きたくない。

ちょっと最後、脇の話で、僕は佐渡島でひとつイベ

ントをやりました。あと、祖谷のほうの私の家も直しましたし、8軒の家を今、直しているんですね。うちの客は意外とひとつの変わった現象がありまして、祖谷が見たくて来るとか、佐渡に行きたくて行くというのじゃないんですね。きっとJTBさんが悪いかもしれないね、何かの情報誌で宿を見る。その宿を選んで、ふっと気がついたら佐渡ですねということですね。つまり立派な美しい宿でなくちゃいけない。その意味で、小値賀は非常に先駆的な働きをしました。

小値賀のもうひとつすばらしいのが、ただただ家を直したというか、ひとつの建物を直しただけじゃなくて、非常に頑張っている「おぢかアイランドツーリズム協会」という地元団体がいるんですね。それに投資したのが地元の財界人、また、行政がバックアップしてくれて、そして結構、外部から入ってきた若者——たぶんおぢかアイランドツーリズム協会で働いている半分以上が、兵庫から来たとか、大阪から来たとか、小値賀の人たちじゃないんですね。しかし、それが健康的、健全の、ある意味で理想的な動きだと思います。結局、外部の人が入って、その地域の魅力を覚えて、そこに住みたい、働きたいということで、初めて立ち直りができると思います。

【宮口】とりあえずそんなところにしていただけますか。

ほんとうに小値賀で古民家を改修して、すてきな宿にされました。7軒の宿泊施設と1軒のレストラン。私もたまたま昨年お邪魔しまして、すてきだなと思って帰ってまいりましたけれども、そういう活動をずっと展開されています。

今のお話の中で、空気を吸うという言葉がありましたね。そのときにやはり宿というのが大事だと。しゃれていて、快適なことが大事だということを強調されたように思います。

それでは続いて、法政大学の図司さんから、地域社会というような視点でコメントをいただきましょうか。よろしくお願いします。

【図司】皆さん、こんにちは。法政大学の図司と申します。よろしくお願いします。

今、カーさんのお話の中で、日本一周をされたのが71年でしたか。71年は私はまだ生まれておりません、75年——昭和50年生まれ、今38歳です。ですので、そういう意味では、カーさんが直接見られたものを私は見ていない世代になってきています。先ほど

養父さんのほうから地域おこし協力隊のお話がいろいろ出てきましたけれども、おそらくカーさんが見られてきたような、大変な過疎地域の様子からちょっと変化してきたところから見始めた世代が今、出てきているのだろうという気がするんですね。私がちょうど団塊ジュニアの一番ぎりぎり端ぐらいになります。先ほど楓さんからお名前が出た『ノジュール』の編集長の竹内君が僕よりちょっと上ぐらいなんですね。なので、おおむね30代から下の世代になってきます。

ちょっと伺いたいですけれども、今日来られている方でも、役場の担当とかで20代、30代の方がたぶんいらっしゃるかと思うんですが、どのくらいいらっしゃるでしょうか。(フロアで挙手をして頂き)ありがとうございます。なので、おそらく過疎問題もこういう世代がこれから担っていく時代になってきているのだろうと思うんですね。

先ほど宮口先生から地域社会というお話も頂きましたが、今日の養父さんのお話から引き継ぐ形でいけば、私も含めて、協力隊など農山村の過疎地域に足を向ける世代は何を見ているのか、どこにスイッチが入るのかという視点で、少し地域社会の話と絡めてお話ができればと思います。

先ほど楓さんのお話の中で原風景の話があって、シニア層はお裾分けという気持ちで行くというお話があったと思うんですが、おそらく協力隊など、私も含めて、農山村に今、足を向けて入り込んでいる若い世代は、もうひとつ踏み込んでいるのではないかなという気がするんですね。かわり合いだと思います。「かわる」とか、「かわり合う」というのがたぶんキーワードかなという気がするんです。

それが何なのかということなんですが、実は私自身が、今は大学教員、研究者という立場でここにはいるんですが、原体験は早い時期に協力隊と同じことをやってきたんだろうなと思っているんですね。

私の学生時代がちょうど95年からになります。95年はご存じのとおり、阪神大震災があり、サリン事件があり、景氣的にもかなり厳しい局面にも入り、私がちょうど大学4年で卒業するときに就職氷河期真っ只中でした。その後も失われた10年とか20年という話がずっと続いてきているわけです。そういう中で、阪神大震災がボランティア元年だと言われるようなこともありましたし、大きく言えば社会貢献なんだろうが、現場に入っていか、何か社会にかかわるということに対して、いろいろ社会情勢の中でス

イッチが入った時期なのかなという気がします。ただ、95年、私が学生時代の当時でいくと、今みたいにムラガールとかいうような次元では全然なくて、おそらく農山村に学生とか若者が入っていくということは、まだかなりほど遠い時代だったんじゃないかと思うんですね。

地域おこし協力隊の前身に当たる地球緑化センターさんがされた緑のふるさと協力隊というのがありますが、そのようなものとか、あるいは宮口先生がかかわられた、国交省になりますけれども、地域づくりインターン事業などの都市部の若者を農山村へ、地域づくりの元気なところへという事業なり仕組みが始まったのが、やはり90年代半ばぐらいだったんですね。そういう協力隊の原点のものがそのころ立ち上がったことが示すように、当時はまだまだ農山村には若者が乏しくて、何しに来たんだというようなところから始まったと思います。私も、比較的近いところに身を置いて、学生時代に現場に飛び込んだという一人です。



そういう私なり、竹内君のような仲間と当時経験したことを思い返すと、私なりに今、学生に言っていることが2つあります。

ひとつはたくさんの大人に出会えたということですね。大人は、自分の両親とか親戚とかいう次元とはまた別の、全く赤の他人の大人に会って、この人はすごいという人にたくさん出会ったということが大きかったのかなと思います。

私の専門は農学部で農業経済という分野なんですけれども、農家調査で、結構元気にやられている農家さんのところに行くと、だいたいご夫婦が出てくるんですね。旦那さんと奥さんが出てきて、旦那さんはロマンを語って、俺はこれを目指すんだみたいなこ

とを言うんですが、横でお茶を入れているお母ちゃんが「何言っているのよ」と言って、金の話をしっかりピンどめするような、きちんとロマンと金の話が組み合っていて、家族経営でやられている農家さんの良質な経営が回っていくんだなということもありました。また、そういう中で、結婚して、パートナーというのは、こういうかみさんをもらうといいんだなとか。また、子供たちが一緒にそこで顔を出してくれたりして、家族とか家庭とはこういうものなんだみたいなことを味わう機会もありました。

やはりそういう場にいると、過疎地域とか中山間地域のようなところに暮らしている人たちというのは、仕事とか生きざまとか、暮らしぶりとか、文化もそうなんでしょうけれども、そういうものと比較的身近に出会えるというところがあるのだろうなというのがひとつです。

もうひとつ学生には、目に見えないからくりが社会にはたくさんあるんだということを農山村で学んでこいと言うんですね。

これは、先ほど宮口先生からお話をいただいた地域社会の話になるんですが、私自身、地域資源管理論というのを専門にしていますが、具体的には熊本の阿蘇の草原、現地では牧野という言い方をしていますが、草原の維持管理が何でああいうふうにきれいに守られてきているのかという話を大学院の間、6年とか7年やりました。ぱっと見は、ほっておいても草原になるんだろうというぐらいにしか思わないわけですが、よくよく阿蘇の人と話をすると、春先に野焼きをやり、あそこに赤牛などの肉牛を放牧し、また、草を刈って餌にし、そういうことをきちんと循環として生業なりわいの中でやってきたという持続性があるわけですね。その中に、もちろん火を扱う技術であるとか、一番粗放的に火を扱いますので、火を消すにしても人数がたくさん要るので、そこには集落の人たちとか牧野組合の人たちが出てきて、維持管理をしているというようなものがその裏にはあるわけですね。けれども、景観として見ている分にはわからないわけですよ。

そういうことを、地域の人たちといろいろな接点を持って話を聞く中で、そこにいろいろな課題があって、草原が荒れるとか、そういう問題につながっている。少なくともそういう目に見えないからくりに対して思いをいたしていかないと、何も解決しないんだということが、私なりに感じられたということもあります。それは先ほど手を挙げていただいた皆さん、若手の皆さんと同じように、昔を知らなかった

りするので、聞かないとわからないということですね。

協力隊の人たちはやはり、そういう見えないけれども何かすごいものが地域にはいろいろあって、そこににじり寄っていくことがおもしろかったり、自分で何かできるんじゃないかとか、仕事にできるんじゃないかとかですね。就職氷河期なので、大企業でそのまま給料をもらえて、安定的にいくという発想はほとんどもうないんですね。それこそ、公務員も安定とはなかなか言えなくなってきている時代ですので、そういうときにやはり自分として何をつかむのかということに対しても、かなり真摯に向き合い始めているのかなという気がします。

そういうことも含めて、地域資源の裏に、先ほど養父さんが言われた地域遺伝子が込められていて、その地域遺伝子がにじみ出ている技とか、生業とか、営みとか、そこにやはり若者は引かれて地域に飛び込んでいっているんだろうと。それは単に廃れたものではなくて、そこにこそ何かチャンスがあって、たぶん、協力隊のように3年ぐらい丁寧に地域の人とつき合って、昔の大変な話も聞きながら、昔を知らない世代なりに突っ走りながらも、これはいけるんじゃないかというような、若さが仕事に突き上げていくような。それも、そのひとつだけで仕事をしていくのではなくて、昔、たぶんあまり価値を置かれていなかったような兼業とか副業とかに近い多就業——三足のわらじぐらいで食って行って、その地域にいられるんじゃないかというような発想におそらく向いてきているんじゃないかなという気がします。

なので、おそらく今までは地方は仕事がないから帰ってきてもしょうがないというような話をしていた時代から変わって、やはり大きく、もちろんそういう意味での仕事づくりも大事なんですけど、まさに養父さんが言ったように、仕事を起こしていくチャンスをどうつくっていくのかということが、もしかしたら地域側でも大事になってきているのかなという気がしています。

すみません、何かちょっと話が散ってしまいましたが、とりあえずここで締めます。

〈宮口〉ありがとうございました。

今の若者が地域に入るときに、目に見えないからくりという言葉が出てきましたけれども、そういうものに魅力を感じるのではないかと。かかわり合うということですね。

私も最近、スマホを買ったんですけども、とにか



く電車に乗ると、みんなこうやって、そこで誰かとかかわり合っているわけですね。そうしないとまた、いじめられたり何かだという記事を最近読みましたけれども、やはりそれとは違う人と人の生身のかかわり合いみたいなものが、過疎地域、農山村のひとつの魅力なんではないかな。

そのあたりも含めて、地域おこし協力隊の話も出てきましたので、4人のお話を伺われて改めて、養父さん、今日の話の延長上に何を語っていただけるでしょうか。

〈養父〉 皆さんの話を聞きながら、僕は頭が15年前にフラッシュバックしていたんですけれども、その当時の学生は凶司君とか竹内君とか。僕は小国の九州ツーリズム大学の第2期生の扉をたたいていました。

思い出せば、阪神大震災が僕にとってはすごくエポックメイキングな年になっています。五ヶ瀬で上流下流文化圏構想のシンポジウムにて下河辺淳さんが来られた講演会があって、神社のところにかがり火をたいて、先生がいろいろな話をされてきました。僕はその当時、民間企業で、まさしくスマホとかITとか、そっちの仕事をやっていたんです。あの地震のときに、人間は何ができたのかと。結局、電話で助けを呼ぶことしかできなかったんじゃないかという提示があって、文明は人間をどんどん弱体化するかもしれない。昔の日本人だったら五感を使ってとにかく生き残っていたのではと。先日、秋山郷に行ったときに、僕は熊と半分遭遇しかけました。グルグルグルとずっと茂みで鳴いている熊をムラのおじちゃんたちが事前に察知して、難を避けたんですが。

僕も取材を15年ぐらいやっています。最初に僕が

取材したのはお百姓さんだったんです。お百姓さんが「なかなか自分の納得できる米がでけん。まだ30回しかつくれたことがない」と言いました。待てよ、30回は30年じゃないかと。僕は民間企業にいるときは、3年ぐらいやっていたら一人前の顔をして、何でも知ってますみたいな顔をしたんだけど、ムラの中では価値観がどうも違うぞと。

炭焼き職人のおじちゃんは、「あんた、山師という言葉を知っとるな」と。山師はあまりいいイメージを持っていなかったんですね。「ムラの中にはいろいろな山師がおって、菜葉をとる菜葉山師、材木山師、いろいろな山師がおる。山師というのは山の価値をわかっている人間や。あそこの山やったらウバメガシがこれぐらいあるけん、焼いたらこれぐらいの金になるとか、ここの辺に行ったらシイタケがこれだけとれるとか、その山の価値を全部わかっている人間が山師や。その山師も最近おらんくなったので、山が二束三文でたき売られるようになった」とか。

生きた知恵がムラの中に入ると山のように出てくるんですね。たぶん、地域おこし協力隊がころっとやられていくのは、ほんとうに生きた知恵がムラの中にまだ残っているということだと思えます。

僕は、ムラガールという名前をつけたときに、さんざんおやじギャグだとか言われました。でも、僕の中でひとつ信念としてあるのは、このムラガールは女性じゃないですか。最後は命でどどんつながっていくんですね。ムラのおばちゃんたちと最初何でつながっていくかという、食です。漬物づくりの名人のばあちゃんがおるよとか、田舎料理の作り方を教えてもらうとか、ムラガールたちは食からおばちゃんたちに入っていくんです。

その先に何が出てくるかという、このムラガールたちは、これから結婚して、子供を産む、または小さなお子さんを持っている。そういう小さな命を宿した人たちはやはり命に対してすごく敏感なんですね。安心・安全な食とか、自然、景観、空気、水だとか、そういうところに最後はつながっていきます。命の産業と言われているものは、農業であれ、漁業であれ、そういう人たちがムラにはまだ残っていらっしゃいます。

この人たちの知恵に、無意識にアンテナ感度の高い都会のムラガールたちが今、反応しているような気がします。それは3・11がきっかけじゃないかなと僕は思っています。僕も阪神大震災のときに頭がつんと殴られて飛び出た世代なんですが、それ以上に大きなショックを受けて飛び出た人たちが今、都

会の中はかなりいて、何か動こうとしていますね。

彼女たちは、彼らもそうなんですけれども、あの当時、一瞬たりとはいえ、お金を持っていても水さえ買えない、お米さえ買えない、スーパーに行ってもがらになっている棚。結局、自分の命を守っていくためには、ライフラインを守っていくためには、農村漁村とつながっていかないと、この先どうなるかわからないと。一瞬であれ、そういう時間をたぶん感じ取ったんじゃないかなという気がします。

そういう子たちが直感で動いていますよね。これになったらお金はどうなるというよりも、ほんとうにこれが正しいんだとか、これをやらなくちゃいけないとか、そういう人たちにフェイスブック、ツイッター、SNSで情報が入ってきて、ある意味直感の中で動いて、農村漁村に入っていくと。

これから過疎問題を考えるときに、僕はある意味この都会の人材と言われる人たちの動きはすごくチャンスだと思っています。その子たちをどう一緒に抱え込んでやるのかという、そこへのムラのしたたかさもすごく大事な時代なんじゃないかなという気がします。

楓さんとか僕とかは、しょせん風の人たちだから、こういうのがあつと。アレックスさんもある意味いろいろなところの情報を伝えながら。でも、みずからもリスクを背負ってやっていたら、こんな上の世代だけではなくて、今、若い20代、30代が何か動き出そうという風潮になっているので、それをどう捉まえるか、これがこれからの過疎の視点じゃないかなという気がしました。

〈宮口〉 ありがとうございます。

今、話に出てきた九州ツーリズム大学というのは、熊本県の小国町で現在も続けられています。私も幸い、第1回目からずっと講義に通わせてもらっていて、養父さんも私の話を聞いたはずなんですけれども、当時何をしゃべったんでしょうか。

ただ、今日、図司さんとか養父さんがしゃべったようなことがかなり世の中に普遍化されてきているなと。そういう延長上に都市の人の気づきもまた、大震災なんかがありましたけれども、生まれてきているのかなと、うれしく思いました。

今、楓さんが手を挙げていますけれども、お互いに何か質問があれば、ぜひお願いしたいと思います。

〈楓〉 今の流れで都市との交流の例として、山形県の飯豊町の取り組みを紹介させてください。

山形県の飯豊町からお見えの方はいらっしゃいますか。

今、図司さん、養父さんからもお話がありましたけれども、実は地域にほんとうに生きた知恵や、学ぶところがたくさんあると思います。

最初に、実は都会の企業にも人材育成上の大きな悩みがありますという話をしました。会社の中でもメールしか使わない、おはようございますと挨拶ができない、某一流大学から出てきた新入社員は電話がかけられないとか、ビジネス書籍を読みビジネススキルをつけることに関してはたいへん興味を持つけれども、机の上をきちんと片づけることができないとか、物事をチームで解決できないなど、様々な問題を抱えています。



そういうような企業の悩みを解決するのは、立派な研修施設に連れて行って、立派な先生、講師のお話を聞くだけではなくて、何かもっといい方法があるのではないかとアイデアを絞り、飯豊町をモデルケースとして、農村と都市の交流プロジェクトが動き始めました。

さっきのムラガールは「はい」と手を挙げた人が来るのかもしれませんが。そういう方もいらっしゃいますし、企業がこれは研修プログラムとしてやりましょうよというケースもあれば、労働組合がこういうプログラムもありますよということで案内するようなケースもあります。

飯豊町では、都市の方たちが解決したい課題に合わせて、こういうようなことを体験してみてください、農家民泊の方たちとお話をしてくださいというような様々なプログラムを用意しています。ただ、行って体験するだけではなくて、この過疎の町、過疎の農業、過疎の畜産業の問題は何かということ、町

の方ときちんとディスカッションする。それに対して、都会から行った人間がどれぐらいのことを返せるのかどうか分かりませんが、地域の方たちで抱えていらっしゃる問題を一生懸命一緒になって考えます。

学生さんの場合は、一緒に雪祭りのお手伝いをし、農作業だけではなくて、藁を編むお手伝いもしています。作業をしながら囲炉裏端で地域の方たちが抱えている心配事などの話を聞き、都会の学生は、その間ずっと携帯電話を持たずに過ごすことのいら立ちを話す。

そういった経験で、この国でおきていることをきちんと理解し、考える訓練ができ、それぞれ都会に帰ったときに視野が広がることに繋がります。JTBはこのような農村と都会のマッチングのお手伝いをしております。ビジネスとして成り立っているかどうかはちょっと別ですが、こういった仲立ちをする役割の人が、それこそ養父さんのような役割かもしれないけれども、どんどん必要になってくるのではないかなと考えています。

実際に飯豊町でこういうプログラムを体験した企業の人事担当者のアンケートですけれども、この経験をすることによって、コミュニケーション能力が非常に期待できるとか、チームビルディングとか協力し合う風土の醸成に非常に効果があるとの結果が出ています。

これはひとつの例ですけれども、このようなプログラムを飯豊町だけではなく、日本各地で取り組みをなさりたい地域が出てくるのではないかと、そしてマッチングのお手伝いをされる方ももちろんこれからどんどん出てくるのではないかなと思っております。

以上です。

〈宮口〉 ありがとうございます。農と交流プロジェクトというのをご紹介いただきました。

実は、何年前だったでしょうか、総務省と文部科学省と農水省が3省合同プロジェクトというので、子ども農山漁村交流プロジェクトというのを立ち上げて、小学校5年生を全員農村に送り込もうと。これはすばらしい壮大な話だったんですけれども、結局、何か当時の政権の費用負担がどうだこうだという問題で細々とやられているんですが、都市の子供を農村に3泊以上させるとほんとうに変わるというきちんとした研究成果があるんです。今の楓さんのご紹介でも、企業の人たちにもきちんと成果があがるとい

うことだったですね。

要するに、今の人たち、若者が、電車の中でスマホの細かい字が何行もあるのをよく読んでいるんですね。しかし、場面に応じた人との会話ができないという、非常にその辺が貧しい状態だというご指摘がありました。ぜひ農山村、過疎地域とつき合うことによって、そのあたりの人間の力というものを回復してほしいものだなというのを今、改めて感じました。

いかがでしょう、ほかに何かパネリスト同士のご質問というのはないでしょうか。



それでは、多少時間も過ぎておりますので、改めて皆さんの発言をふまえながら、少し理屈とか理念も交えながら、過疎地域が誇りを持ってこれから世の中で大きく生きるためのアドバイスをいただきたいと思います。養父さんの今日の講演では、かなりまだまだ羽ばたけるといようなご指摘がございました。そのときにやはり都会には困っている人もいるし、その中にも人材はたくさんいる、それをいかに地域に引っ張り込んで活用していくかという話もございました。

そういういろいろなことをふまえながら、過疎地域がどういう魅力を発信していけばいいかということについて、またお一人ずつ、7分程度ぐらいお話をいただければありがたいなと思います。

それでは、カーさん、まずお願いできますでしょうか。

〈カー〉 時間が限られている中で、最後にやはり1点だけ、くれぐれも皆さんに覚えていただきたいというか、ぜひ言わせていただきたいのは、例えば先ほどのJTBの企画には、懐かしくて美しい日本の原景を旅する、あるいは若いときに行った、あのころ行っ

た田園風景とかを求めていくお客が多いとおっしゃいましたけれども、懐かしくて美しい日本の原景はあるのか。きっとあのころ行った田園風景は今行くところとずっとするよ。いや、それが現実。非常に寂しい話で、これだけ日本の田舎を愛している私、これほど全国的にいろいろな企画を持っている私でさえ、場合によって、電車に入った途端、ブラインドを引っ張って、外を見ないことにしている。あまりにも見苦しい、あまりにもつまらない、粗末な、ごみごみ、ごたごたした田舎なんですね。

それには景観という非常に大きな問題があります。今日は行政の方も多し、一般市民の方もいろいろ来ているので、今までは道路をつくれればいい、例えば古民家を2つ、3つやって、数千万かけても、依然として、年に何億も何十億も道路だとか護岸工事とかに使うシステムがそのままなんですね。

しかし、観光客があんなものを求めて来るのかな。あるいは起業家——アメリカなどのいろいろな実業家とか起業家とかはど田舎に住んでいるんだけれども、住んでいる理由は美しいから、自然が残っているから、その中の温かみがあるわけなんですね。それがなければ、あの見苦しい粗末で、中途半端な田舎には到底住めない。やはり都会のほうが住みやすいし、田舎のマイナスが何をやってもありますので、そのプラス分はやはり田舎の自然、文化、美しさ、景観です。

それで、ちょっと非常にシビアな問題なんですが、なぜ小値賀があれだけ成功できたかというのは、小値賀にも少し変な公共事業はあるけれども、幸い比較的少ないんですね。だから、小値賀はまあまあきれいな海岸とかそういうのが残っているから、お客を引っ張ることができます。

これまでは、道路をつくれればいい、大きな建造物をつくれればいいという単純な感覚でやってきたけれど

も、今後は逆なんですね。景観は勝ち負けの基準となりまして、美しいところにはホープがある、健全な観光がつくれる、お客に来ていただける、そして、事業家とか若者が夢を持って来てくれる。美しくない、中途半端な、つまらない、汚い田舎には、やって来ない、地図から消えてしまう。そこまで景観というのは大事な問題でありまして、かなりシビアにこれから考えなくてはいけないと思いますね。

公共事業に関しては、僕は決して反対じゃない。現実、田舎はそれに依存してしまいましたよね。農業、林業、漁業という話が今日は出ましたけれども、現実、田舎の収入のほとんどは公共事業ですよ。ヘルメットをかぶって、何かをつくるのが現実なんですね。そういう中では、突然やめようと言っても、それは現実的じゃなくて、逆に増やしてもいいぐらい。

けれども、中身を変えること。農水省はとにかく林道をつくりたがるんですが、ほとんど無意味です。かなり大きなダメージを与えているけれども、つくらなくちゃいけない、そういうシステム上の構造がある。でも、それをつくるより、田舎にほんとうに必要なものを。例えば祖谷には簡易水道がないんですね。道路はどんどんできちゃうんだけど、誰も必要としない道路で、でもとにかくつくらなきゃいけない。だけど、外部の人たち、あるいは観光客が入ってきて、ほんとうに必要な簡易水道がない。つまりシステムが狂ってしまいましたね。道路という道路は特につくり過ぎたぐらいだけれども、必要なものはできていない。

7分以内とおっしゃいましたので、最後、この公共事業に関してひとつ大事な点です。

日本は見事にお座敷を汚してしまいました。あとは掃除することですね。掃除はすばらしい、おいしい公共事業です。同じヘルメットをかぶせながら、同じゼネコンを使いながら、使い古したハウスとか学校とか、そういうのを撤廃、撤去ですね、根こそぎそれを全部なしにして、きれいにする。また、要らなくなったダムやら、そういうのを撤廃、撤去。あと、電線埋設だとか、先進国でそういうのをやっていないのは日本だけであって、さっきの白川郷できれいだったのは、鉄塔、電線もないということでもあるんですね。

つまりそういうすばらしい公共事業、その村とか町のための公共事業があるわけですから、その切りかえを上手に考えて、そして、これからダメージを与えないことをいかに考えていただけるかということがポイントですね。世界の観光客がフランスのプロ



バンス地方、イタリアのトスカーナとかハワイの島々、そういうところに行きたい主な理由は、きれいだから。きれいさははかり知れない大きなパワーでもありますし、今後はほんとうに真剣に考えなくちゃいけない。

それだけある程度切りかえができて、いい方向に持っていくことさえできれば、あとは古民家再生、またいろいろあるんですね。例えば僕のかかわっているグルメツアーとかイベント、いろいろなことが考えられるけれども、まず地盤として、今後はそういう景観、美、原風景、美しさ、それに絞って考えることができれば、きっと日本の過疎地域には明るい将来があると思います。

ありがとうございました。

〈宮口〉 ありがとうございました。

景観にシビアになって、とにかくお金の使う先を変えろというお話でした。古民家再生だとか、いろいろなお金の使い方があると。基本は美しさ、美学であると。

幸いお金がないために公共事業は最近かなり減ってはきていますけれども、長年の習慣で、行政のお金の使い方というのがなかなか変えられない。過疎債のソフト事業への充当というの、必ずしも真剣にやられていないような自治体も間々あると見えています。ぜひ会場の方々、お考えいただきたいと思います。

それでは、続きまして図司さん、少しコミュニティ論的に今度は話していただけますかね。

〈図司〉 先ほど協力隊の話に少し引きつけながら、若い世代がなぜ農山村に行くのかという話をしたんですが、今度は、先ほどの養父さんの話にも引きつけて考えると、過疎地域なり地域側のほうがそういう人たちをどう受け入れる準備をしていくのかという話が大事になってくると思うんですね。

先ほど幾つかの要点の話が養父さんからも出ていたと思うんですが、私自身もよく現場でお話をしているのが、世代交代のバトンの話になぞらえてよくするんです。過疎化が進んで、高齢化が進んでいるから、バトンを後継者に渡す機会という話が出るんですが、先ほど手を挙げていただいた方はたぶん、何となく近い思いを持ってもらえればありがたいんですけども、受け手の若い世代もちょっとモノを言わないとだめだろうなと思っているんですね。こういうふうにはバトンをくれという話だと思っ

それは、先ほどのカーさんの「掃除をしたほうがいいんじゃないか」とかいう話にもたぶんつながってくると思うんですが、人口が日本全体でも減ってきている中で、世代としての人口も減ってきているわけですね。シルバー民主主義という言葉が最近出てきていますけれども、上の世代の層に比べればかなり同世代の数は減ってきている中で、その中でどういうふうには資源を維持管理するのかとか、地域を動かしていくのかとか、その次の世代としていろいろなことを議論しないといけないでしょう。

昔の農山村は、みんな一緒に農林水産業、1次産業をやっていて、昼間もその集落とか地域にいて、四六時中、比較的近いところにいるような環境であれば、背中を見て盗めとか、学べとか、それで技とか知恵が伝わるような時代だったと思うんです。過疎が進んでいる地域にゼミ合宿でも行くんですが、学生に聞くと、過疎が進んでいるから、みんな高齢者ばかりだろうと思っているんですね。だけれども、夜、飲み会をやると結構若い人がいるんですね。結局、若い世代はいるんだけど、昼間は勤めに出ているから地域にいないわけで、いるのはいると。だけれども、今までどおり背中で学べといっても、一緒にいる時間が減ってきているので、わからない話がかかなり出てきているんですね。だから、地域に誰がいるのか自体も、よくよく考えると、実はよくわかっていないような時代に入ってきているんじゃないかなと思うんですね。そのかわりに過疎化とか、高齢化とか、限界集落とか、そういう言葉だけが先走っているような、このズレをどうするかというのは極めて大事な話かなと思っています。

言葉として切り取られてイメージが先行しているものが、実際にそれぞれの今日来ていただいているような皆さん方の地域としてどうなのか。地域に誰がいるのか、何をしているのか、それがどういうふうには課題になっているのか、ということをしっかり見つめ直すことが大事かなという気がするんですね。

実際に私も今、総務省の協力隊の研修などのお手伝いもさせていただいていますけれども、ちょっと辛口の話になるかもしれませんが、今日の養父さんの話をきっかけに、うちも頑張ってみるかという話がたぶん今日出てくると思うんですね。それは私はすごく期待したいところでもあるんですけども、足元をしっかり固めてからぜひ手を挙げていただきたいというのも本音のところなんですね。

実際に協力隊の悩み相談を聞いていると、協力隊自体が悪いこともあるんですね。農山村に行くと



りあえずやってみたいという勢いがあり過ぎて、暴走するケースもあります。暴走するケースがあったときに、おいおい、地域社会というのはそんなに事がすぐ動くものじゃないぞと言って若者をたしなめるのも地域側では大事です。

逆に、若者のほうが丁寧に丁寧に地域に住んでいる人たちの話を聞いて、地域に誰がいるかとか、何が問題なのかということを知っているケースもかなりあります。だけれども、残念ながら受け入れて頂いている自治体の皆さんの方がそれを聞いてくれない。ある意味、放任しているとか、「頑張ってくれ。期待しているから」みたいな話でやってきて、せっかく彼らが集めてきている情報に関して共有する術がないとか、何らかのミスマッチがかなり出てきているのも事実です。

先ほど養父さんと話をしたら、うまくいっているところが半分、あまりうまくいっていないところも半分あるんじゃないかと。これは感覚の問題なので、ちょっとははっきり何とも言えませんが。そういう意味でも、地域の側でしっかり現場を見据えて、せっかく追い風になっているので、そういう若者と一緒にやっっていこうというような足場固めをまずはしっかりしていただきたいなという気がします。

協力隊のような3年間よその人を受け入れる事業はたぶん、本邦初だと思うんです。そういう意味では、「高度な都市農村交流」なので、先ほどの子供たちの受け入れは1週間という話がありましたが、3日とか1週間もよその人を受け入れたことがないのに、いきなり3年間というのはハードルが高すぎるので、やはりきちんとよその人となじむようなことをしてからチャレンジしても遅くないと思いますよ、という話は地域の皆さんにさせていただいています。

追い風になっているからこそ、足元、その地域社会

のありようを冷静に見つめると、おそらく高齢化率が高くて、若い人はゼロじゃないところもかなりあると思うんですね。とすると、どういう人たちと若者が会うことがチャンスを広げていくのか、ある意味冷静に足場を固めていただいて、前向きに進んでいただきたいなというような気がしています。

〈宮口〉 若者に何を受け継がせるかというか、何を学ばせるかというのは、地域の中でも大事なんじゃないかというようなご指摘もあったと思います。協力隊との関係では、そこでどう知恵をつないでいくかということなのかなと受けとめました。

楓さん、田舎のすてきな写真を今日たくさん見せていただきましたけれども、結局それが地域の誇りとしてどういうふうに通じられていくといいのかとか、その辺についてちょっとお話いただけませんか。

〈楓〉 今、いろいろなところで情報発信、情報発信と言われています。もちろん役場の方がホームページで一生懸命情報発信をしたり、いろいろな方を通して情報発信することは大事ですし、それはどんどんやっていただいたらいいと思いますけれども、きれいな写真にしても、おもしろい情報、おいしい情報にしても、やはりその地域の方たちがどうやってこの景観を守っているのか、この味をつくるためには、こういう苦労もしているし、生産者の人とこういうようなストーリーがあるとか、それから、これはもう失ってしまったものだけれども、最近復活させたというような物語を、長々とではなくて端的な文章か言葉で、それを写真、動画と一緒に発信するのが効果的だと思います。

プレスリリースもたくさん私のところにも頂戴しますが、やはり「私の町は今これなんだ」ということを、別にプロのコピーライターに書いてもらう必要はないのですが、ほんとうに心と気持ちを込めて書いてくださったものは、それが生きた情報として伝わってきます。

SNSの使い方とかフェイスブックの使い方というのは、おそらくそういうプロフェッショナルがいろいろいらっしゃるのだろうと思いますけれども、毎日毎日、役場の職員の方がフェイスブックを上げたりするのはすごく大変ですよ。それよりも地域協力隊の方とか地域のファンをまずつくって、役場の方たちじゃなくて、そのファンの方たちに情報発信してもらい、拡散してくれるのが一番早道なのではないかなと思います。

ちょっと情緒的な話で恐縮ですけども、最後に、私は地域の魅力は手ざわりだと思っています。

古民家がすてきなのも、古い木をさわったときの手ざわり、大黒柱の手ざわり。清水が流れていたら、私たちはすぐ手を入れて、おっ、冷たいとか、そうでもないとか、やはり手でさわってみたくになります。織物もそうですし、それから器もそうですし、それからお野菜でもそうですよね。ひとつひとつ手でさわってみて、その感触の中で、これは本物だとか、この手ざわりを忘れないでいたいという、ほんとうに情緒的なことで恐縮ですけども、そういうものがおそらく伝わり、記憶に残ると思うんです。

ところが、地域の方はいろいろな自分たちのものはあまりさわらないですね。だいたい、地域の人同士はあまり握手しないし、あのおじいちゃんの手はすぐごつごつしていたなと思って、あまりしない。お母さんの手は握るのかもわからないですけども。

そんなことひとつひとつ、地域のあるものにぜひさわって、その感触がどうで、それを皆さん方の言葉であらわす。それを積み重ねていくと、情報発信のときに必ずヒントになっていくのではないかなと思っています。これからも日本中隅々まで、いろいろなものをさわりに出かけたいと思っています。

〈宮口〉 ありがとうございます。

短い言葉でインパクトがあるように、それからファンに語らせるといいというのがありましたね。さわる。楓さんは昔、温泉があったら必ず入っていましたよね。そういうことで、何かがあったらさわると。そこで本物を見分けると。地域の人たちもそういうというお話がありました。

それでは、養父さん、どうですか。今までの話を聞いて、もう一言。

〈養父〉 僕は、グリーン・ツーリズムをとにかく広げたくて、15年前にこの世界へ出たんですけども、民主党政権の中で唯一いいなというのは、「コンクリートより人」という言葉が出ましたよね。僕もアレックス・カーさんの本を読んだときにほんとうに思ったのが、日本の農村、漁村、島はコンクリートに固められて、日本の美しい農村がどんどんなくなっていくと。

不景気になったときに、アメリカは公共事業にどんどん投資していききましたよね。ヨーロッパでは、逆に休みを増やして、バカンス法を整備して、働く機会

をたくさんの人に与えてと、全然戦略が違いましたよね。日本は悲しいかな、アメリカ的な公共事業のほうにどーっと突入していった。ただ、今は、お金もなくなったので、それより、コンクリートから人へと。

そう考えれば、コンクリートから人へというのはある意味、ダムからツーリズムへと置きかえ、都市農村交流という6次産業化の中で、従来公共工事の仕事で一日8,000円、1万円稼いでいた人たちが、まちの人たちと交流をして、民泊に泊まってもらうとか、おいしいレストランで食事を食べるとか、産品を売るとか、案内するとか、そういう新しい観光の中でどれだけ産業をつくっていくか、ということだと思います。

観光庁も、「住んでよし」というのをすごく今、言い始めているんですね。それは、地元の人たちが地域づくりをやって、ほんとうに自分たちが住んでよかったと思うと、結果都市部からも人が訪れるようになるということなんです。



例えば、僕がよく皆さんに問いかけているのは、皆さんの地域の中で好きどころが3つ以上ある方はどうですかと。ちょっと皆さん、どうですか。皆さんの地域の中で好きどころが3つ以上あるぞという方は手を挙げていただけますか。やはりありますよね。じゃあ、次に、その3つ以上ある地域の好きどころを自分の言葉で語ってください。別に指名しませんが。意外とそうなる、うーんと皆さん詰まるんですよ。

さっきの楓さんの話にもつながるんですけども、これからはパンフレットで書かれたことをしゃべっても、誰も響かないんです。そうじゃなくて、自分の言葉で、なぜそこが好きなのか、自分人称でその物語を言わなくちゃいけないんですよ。その話を聞

ただで、それだったら行きたくなるというもの
がこれからの新しい観光なんです。

そう考えれば、ひとつの事象に対しても、100人い
れば100の物語が出てきます。今はフェイスブックと
かSNSの時代なので、その話を聞いたら、それは何
が何でも行かんとうしょうがないよというぐらいの地
域の資源は必ずあると思います。ですので、明日か
ら、今日からでも、自分の好きなことを、それは何で
俺は好きなんやろうと、何月何日にここから見る夕
日が俺はやっぱり好きなんやとか、それは何でかと、
自分なりの物語をまずは自分で発信されてみる、そ
こから何かスタートするんじゃないかなと思いま
す。

過疎の問題は大変ですけれども、今日とはにか
く行政の方がたくさんいらっしたので、そのき
かけづくりを、できれば皆さん一人ずつやれること
から、そんな大きな話じゃなくてやれるところから、
地元の人たちにそんな話をまずはちょっと働きかけ
てみる。その中で、よそ者が来たら、よそ者も一緒
になって、その宝の話に参加させるとか、何かそんな
ところから進んでいけばいいんじゃないかなと思
いました。

以上です。

〈宮口〉ありがとうございます。

自分の言葉で語れるかという問いかけが今ありま
した。ぜひそれは大いに語っていただきたいと思
います。

私は地理学者ですので、この地域はこうだとか、い
ろいろなところを見ながら、自分なりに語ります
けれども、よく田舎で講演すると、皆さん、自分の地
域は、どこに何があるかはものすごく詳しく知
っている。しかし、あそこに生えている木にど
んな価値があるか、それを自分の言葉で語
れますかというようなことをよく言うんです
けれども、ぜひ自分の地域を語るというこ
とを大いにやっていただきたいなと思
います。

それでは、かなりお待たせしましたけれども、友
広市長、今日、必ずしも離島、半島というこ
とで話はずまりませんでしたが、皆さんの話を聞
かれて、地域を背負われる立場として、これ
からどう考えていきたいかということをお話
いただければと思います。

〈友広〉ただいま地域を語るということでご
ざいましたので、最初、体験の関係をお話
させていただいた

んですが、実際の例をお話させていただき
たいと思います。



体験型修学旅行で高校2年のときに来た子供が、大
学に進学をするという予定だったけれども、漁師に
なる道に進路を変更して、お世話になった平戸市で
実際に漁師として今、頑張っている事例もございま
す。また、修学旅行に来るまではなかなか積極的で
ない子供が、元気な言葉でお礼の手紙をくれたり、旅
行から帰ってきたら、子供が魚を買って料理をして
くれたと、そういう驚きのお母さんのお手紙をいた
だくということなどがあっております。

このことは、子どもたちが、お昼は農業、漁業体
験をして、夜は初めて家族の一員として過ごすとい
う中で、自然の厳しさとか、あるいは収穫の喜びを
覚えて、コミュニティといいますか、コミュニケーション
能力を高めて、力強く生きる力を身につけてくれ
たんじゃないかと思っております。

また一方、受け入れた農家、漁家の皆さん方も、
子供たちの喜ぶ姿を見て、自分たちのなりわいに自
信を覚えられるということとあわせて、ふるさとを
誇りに思う喜びといいますか、そういうことが生き
がいの形成につながっていると言えるんじゃない
かと思っております。

そういうことで、我が北松浦半島については、い
ろいろ取り組ませていただいておりますが、今日、
各パネリストの皆さんのほうから具体的な事例
とか提案をお聞きいたしまして、過疎地域ある
いは農山村には、まちづくり、あるいは人づくり
の素材が豊富にある。それを捉えて、どう実践、
実行していくか。そのために実行、実践するポ
イントは何なのかということ、今日お聞かせいた
だいたところは、原点とか風ということがある
んじゃないかとい

うようなことを私として頭に入れさせていただいたところでございます。

今日お話を聞いておまして、行政では、手段で終わっているのではないか、目的までたどり着いていないんじゃないか、目的にたどり着くまでの取り組みということが必要であるということも、私としては今日、再認識をさせていただいたところでございます。その目的にたどり着くためには、NPOなど民間との連携あるいはネットワークづくりが必要だと思えますし、私としては市民とともに協働で取り組んでいくコーディネーター役を果たさなければならぬんじゃないかと、そういうことを認識したところでございます。

今日のこのことを思いまして、私は最後に、皆さん、まちづくりにスイッチオンでいきましょうということを申し上げたいと思います。

〈宮口〉 力強い言葉をいただきました。ありがとうございました。

時間がちょっとありますので、カーさんにもう一回伺いますが、先ほどは、今の日本の田舎というのは、全体的に見て非常に魅力のない状態になっているというご指摘だったのでしょうか。そのあたりをもう一回お願いできますか。

〈カー〉 本来のよさはまだ残っていますよ。

だから、全く救われぬとか、どうにもならないといったところも少々あるかもしれないけれども、逆に、まだまだ何かの理由で変になっていない、あるいはちょっと手をつければ、それこそ掃除すれば、もとのよさに戻る、そういうところが結構あるんですね。

例えば私がつき合っている重伝建地区（重要伝統的建造物群保存地区）とかそういうのはあちこちに



あるんですけれども、意外と伝統建造物指定を受けた時点では、場合によってあまりきれいじゃないね。伝統建造物というんだけれども、ほんとうはトタン屋根だったり、全然きれいじゃない。

少しずつお金を入れて、例えば祖谷はちょうどそういうことを今やっているんだけれども、トタン屋根を取って、茅葺きに戻すとか、あるいはトタンを残したにしても、全くのえぐいブルーじゃなくて茶色にするとか、意外とちょっとしたことできれいに直っていく。例えば古い宿場町のそういう伝統地区では電線を埋めるとか、埋められない場合は、和歌山県の高野町がやりましたね、電線を埋める資金がないから裏へ持ってきたんですね。だから、メイン道路じゃない。

だから結局、工夫なんですね。そういう工夫をして、欲しいところに上手にお金をかける。今までのシステムは、例えば杉植林から、わけのわからない護岸工事から、林道から何やら、そういうのに年々すごい予算がつくけれども、ダメージを与えるばかり。そうじゃなくて、健全な、掃除、直し、つまり、レベルアップです。

だから、くれぐれも言っているんだけれども、僕は、日本の公共事業が減るということはあまりよくないと思う。増やしてほしい。オリンピックを基準でもって、逆にばんと美化、健全な田舎をつくるための事業にどんどん、今の倍でもいいから回してほしいなという思いですね。ただ、従来の仕方だと、どんどんだめになっていく。その意味でホープがあるんですね。絶望的な日もあるんですが、結構、ああ、こんなことさえやればきれいになるんだなど。あるいは祖谷とかで実際今までやってきたケースはありますし、小値賀もそうですね、ほんとうにきれいになったというケースも少なくはないので、これから望みがあるんですね。

〈宮口〉 ありがとうございました。

公共事業は増やすべきだと。しかし、使うところを考えろと。省庁縦割りの中で、一昔前から見れば事業的対応が相当柔軟にはなってきたんですけれども。そのあたりをほんとうに、掃除も含めて、いい形にするように。

私も伝建地区で、指定されたときよりも、住民がだんだん考えるようになって、ほんとうにすばらしい町並みになっていった例を知っています。そこには住民の学びというのがあるんですね。事例を見せられて、学んで、ああ、やっぱり俺もそうしようという

ふう仲間になっていくというようなプロセスが、美しさをつくり出すというためには必要なのかなと思いました。

だいぶ時間も迫ってまいりましたので、そろそろ終わりにさせていただきたいと思っておりますけれども、今日は5人のパネリストの方から、過疎地域のあり方、つき合い方等々についてたいへん意味のある指摘をいただいたと思います。

基本的には、美しさというものは単にどこかから取り出してきた美しさではなくて、そこに生活の知恵がある、人の暮らしというものがある、それが感じられるから人は引かれるんだと。そして、そういうことが地域の人たちにもわかる。ここにはやはり学びということ、お互いに学び合うという、ああ、都会の人がこれに喜んでくれるのかというようなことに対する学びがあって、そしてそれが誇りになり、そしていい形でそれをプレゼンテーションできる、見せられるということになっていくのだろうと思います。

そしてもうひとつ、今、過疎地域を中心に、地域おこし協力隊のような若者がたくさん全国に入ってきているわけなんですけど、やはりその若者たちは、人と人のかかわり合いというのを求めて入ってきているのではないかと。楓さんが、エリートが電話もかけられないというような話を出されましたけれども、都会ではどうも普通の会話がなかなかない。ということは、過疎地域に若者が入ってくれば必然的に会話は増える。おばあちゃんたちが、孫のような存在が来たら、何でもしゃべる。けれども、そうじゃないときに過疎地域に会話がちゃんとたくさん行き交っているかと。ここはちょっと心配をしておりました。

やはり会話というのはパワーです。人間の数は少ないんですから、その中に多くの会話があって、そして支え合いがあるということが地域社会のパワーだと私はずっと言ってきました。そして、そこに美しさというもの、都会にないことが我々にはできるんだ、都会にないものがちゃんと表現できるんだという、そういう学びの美学みたいなものももっともっと定着していけば、過疎地域の将来は明るいのではないかなというようなことが、カーさんの指摘などにもあったのではないかと思います。

それから、地域社会に目に見えないからくりがあるということ。要するに地域社会が円滑に動いていくしくみですね。都会のようにいちいちルールを決め、制度を決める、そんなことがなくても人間が自然にできるんだというようなところにも、今の都会の若者がひかれるのかなと感じました。

というわけで、いろいろな力を過疎地域はお持ちです。もっと簡単に言いますと、家と土地と食べ物があるから、実は非常に強い存在なんですね。ですから、若者が紛れ込んできても泊めてやることのできるわけですね。私の学生も毎年、青森のりんご村でお世話になっておりますけれども、そういう交流の中でますます自分たちの人間的なパワーを発揮していただきたいと思いますし、申し上げて、まとめさせていただきたいと思います。

ちょっと時間が1分ぐらい超過しましたがけれども、これでこのパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。

5人のパネリストの皆さんに大きな拍手をお願いしたいと思います。



